

2018年3月期 第3四半期 決算概要

テルモ株式会社
常務執行役員
北畠 一明

2018年2月8日

2018年3月期第3四半期の決算概要について説明いたします。

ハリケーンの影響をはねのけ好調堅持

(億円)

	16年度Q3累計	17年度Q3累計	増減率	為替除く 増減率
売上高	3,744	4,370	+17%	+12%
粗利益	2,037 (54.4%)	2,447 (56.0%)	+20%	+15%
一般管理費	1,203 (32.2%)	1,436 (32.8%)	+19%	+15%
研究開発費	245 (6.5%)	287 (6.6%)	+17%	+14%
営業利益	589 (15.7%)	724 (16.6%)	+23%	+14%
(のれん等償却除く)	731 (19.5%)	943 (21.6%)	+29%	+21%
経常利益	522 (13.9%)	707 (16.2%)	+35%	
純利益	318 (8.5%)	635 (14.5%)	+99%	

期中平均レート	USD	107円	112円
	EUR	118円	129円

- 売上高 : ハリケーンの止血デバイスへの影響は軽微。心臓血管カンパニーが牽引し二桁伸長を維持
- 営業利益 : 全カンパニーにおいて二桁伸長を継続
- 経常利益 : 前年同期の為替差損 (37億) に対し、今年度は差益 (2億)
- 純利益 : 米国税制改革による、法人税等の一過性の減少 (140億) もあり純利益が倍増



2/24

今回の決算のポイントは、プエルトリコの生産子会社に対するハリケーンの影響をはねのけ、好調さを堅持したことです。現地のアソシエイトの懸命な努力と在庫のマネジメント、営業部門の連携等により、影響を最小限に抑えることができました。

売上高は、心臓血管カンパニーが牽引し、前年同期比17%増の4,370億円となりました。

営業利益は、上期に続き3カンパニーともに二桁伸長となり、全社では前年同期比23%増の724億円となりました。

純利益は、事業が好調に推移したことに加え、米国税制改革により、法人税等に一過性の減少140億円もあったことから、前年同期比でほぼ倍増の635億円となりました。米国税制改革の影響については、次のページで詳細を説明いたします。

米国税制改革の影響

- 米国税制改革により、法人税（連邦税）税率が35%から21%に引き下げ
 - 法人税税率引き下げによる繰延税金資産・負債の再評価等の結果、
17年度Q3において法人税等の一過性の減少が発生し純利益を押し上げた（140億円）
 - 一過性の純利益の増加は税効果会計による影響であり、キャッシュフローには影響しない
 - Q4以降の減税効果として純利益・キャッシュフローは増加を見込む
- メディカルデバイスタックスは凍結期間が延長（18年1月～19年12月）



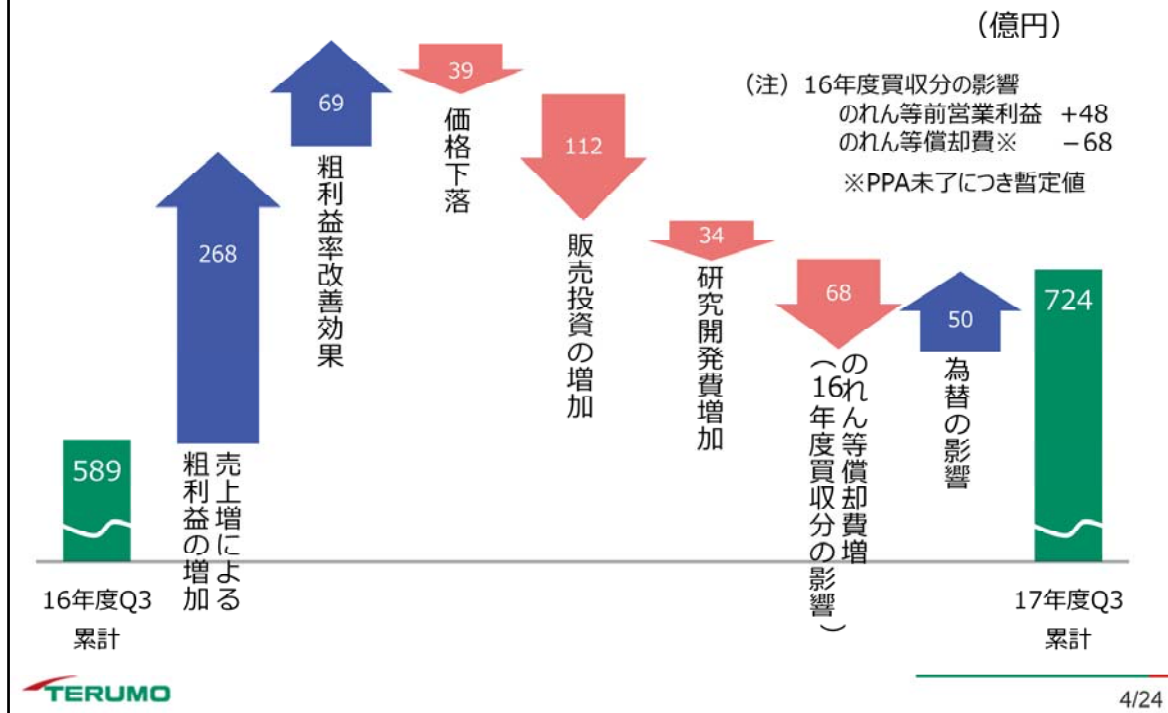
3/24

米国税制改革に関して、法人税率の引き下げとメディカルデバイスタックスの凍結期間延長の影響を説明いたします。

法人税率については、従来の35%から21%に引き下げられた結果、一過性の影響として、当第3四半期に繰延税金資産・負債の再評価等に伴う140億円の法人税等の減少が発生し、純利益を押し上げました。ただし、キャッシュフローには影響はありません。一方、今後の影響としては、税率の低下により年間の税負担額が約20億円減少することで、純利益・キャッシュフローの増加を見込んでいます。

メディカルデバイスタックスについては、2016年から2年間凍結されていましたが、引き続き2018年1月から2019年12月までの2年間凍結されることが決まりました。そのため、当期の業績には影響ありません。仮に凍結が解除された場合は、年間で20～30億円程度の費用増を見込んでいました。

営業利益増減分析



営業利益の前年同期比での増減分析です。

最大の増益要因は、売上増による粗利益の増加です。上期に続き第3四半期も売り上げが好調であったことから、粗利益が大きく増えました。一方、販売投資の増加額、研究開発費の増加額が、第1、第2四半期と比べて第3四半期は増加しました。第1、第2四半期は計画に対し販管費の発生が少ない状況でしたが、第3四半期は販管費が増えており、この傾向は、第4四半期も続くと見えています。為替の影響については、次のスライドで詳細を説明いたします。

営業利益増減分析における為替の影響

為替の影響増：上期累計 + 6 億円 → Q3累計 + 50 億円

- 円安・ユーロ高の影響
- 円安・新興国通貨高の影響
- 米ドル：プエルトリコ生産停止でドル費用減、その結果一時的に円安ドル高がポジティブに影響（通常はニュートラル）
- 棚卸資産未実現利益の減少：換算に適用する期末レート差異の縮小

期末レート比較 (円)				期末レート比較 (円)			
	16年度 9月末	16年度 12月末	差異		17年度 9月末	17年度 12月末	差異
USD	101	116	+15	USD	113	113	0
EUR	113	123	+10	EUR	133	135	+2



5/24

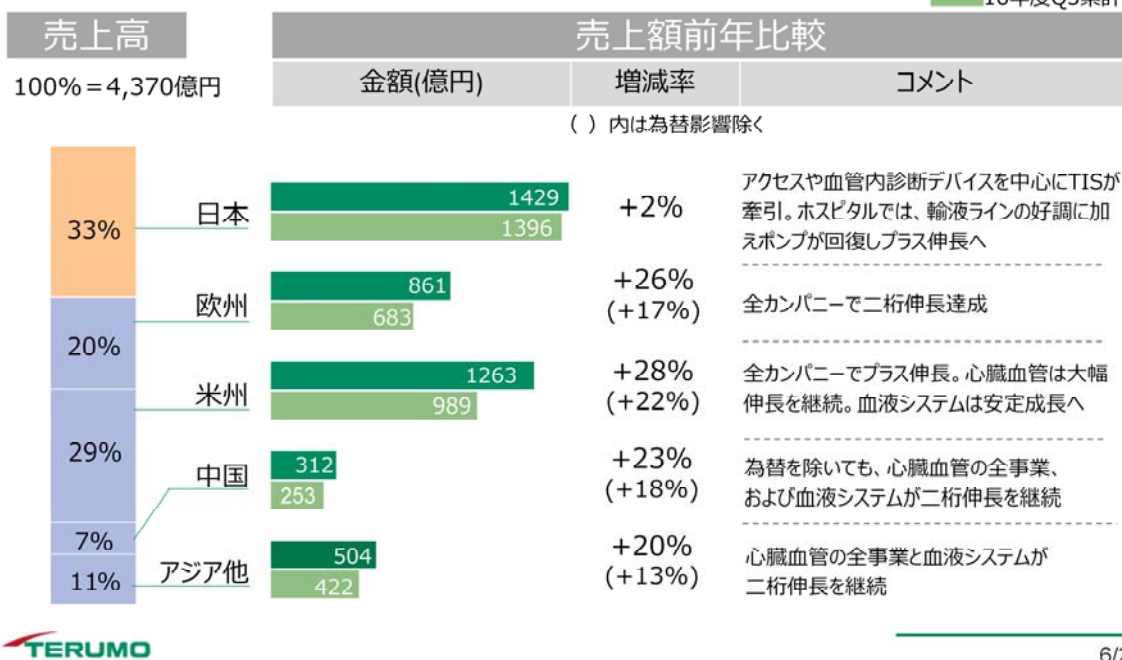
上期の為替の影響額はプラス6億円と殆ど影響のない水準でしたが、第3四半期累計ではプラス50億円へと増えました。増加の要因は、期中平均レートの変動と期末レートの変動による影響です。

期中平均レートの変動による影響は主に3つあります。第一に円安・ユーロ高の影響です。上期にもこの影響はありましたが、第3四半期は影響額が増えています。第二に円安・新興国通貨高の影響です。第3四半期に入り、中国やタイ、中南米等の新興国通貨が対円で高めに推移しました。第三は、プエルトリコでの生産停止に伴い、米ドルベースでの費用が減少した影響です。通常、営業利益に対する米ドルの為替感応度はニュートラルですが、米ドルベースでの費用が減少した結果、一時的に円安・ドル高がポジティブに影響しました。

期末レートの変動による影響は、棚卸資産未実現利益の減少です。前年度の9月末と12月末の期末レート差と比べて、今年度の9月末と12月末の期末レート差が小さかったため、前年同期比で未実現利益額が減少しました。

地域別売上高

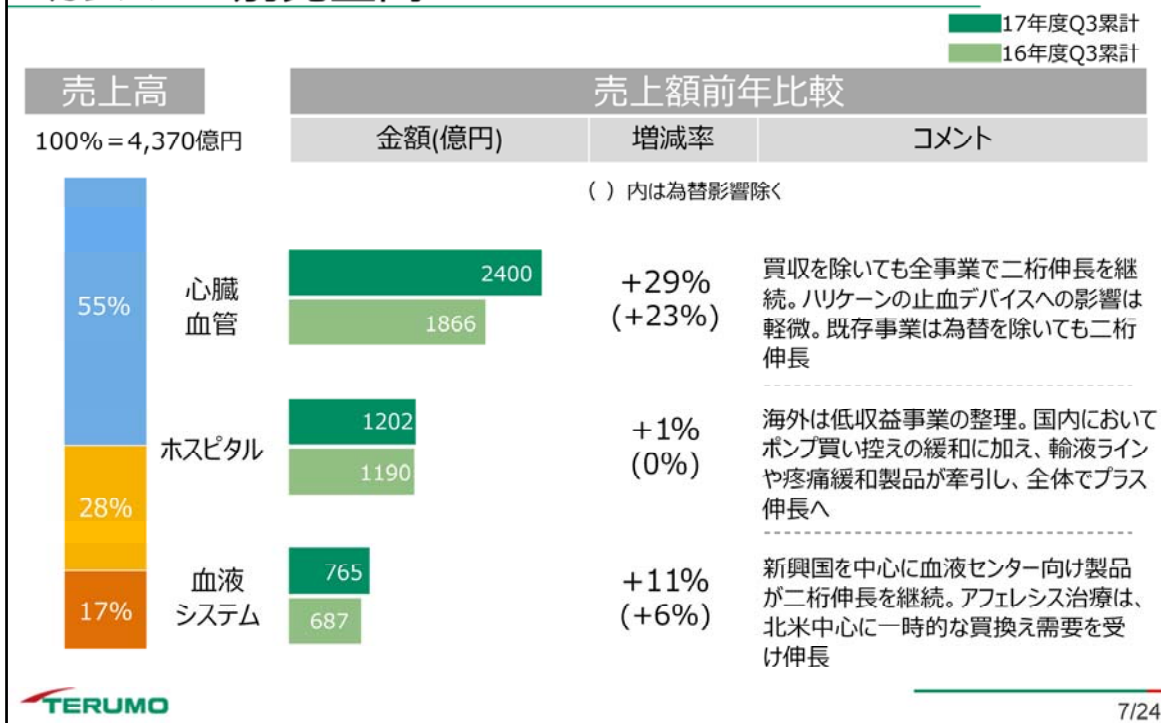
■ 17年度Q3累計
■ 16年度Q3累計



地域別の売上高です。上期までの傾向とあまり変わりはありません。

日本の売上高は、上期が前年同期比 1 % 増でしたが、第 3 四半期累計では同 2 % 増となりました。第 3 四半期単独では 5 % 増となっています。海外の売上高は、上期と同様、いずれの地域も伸長率が 20% を超えました。

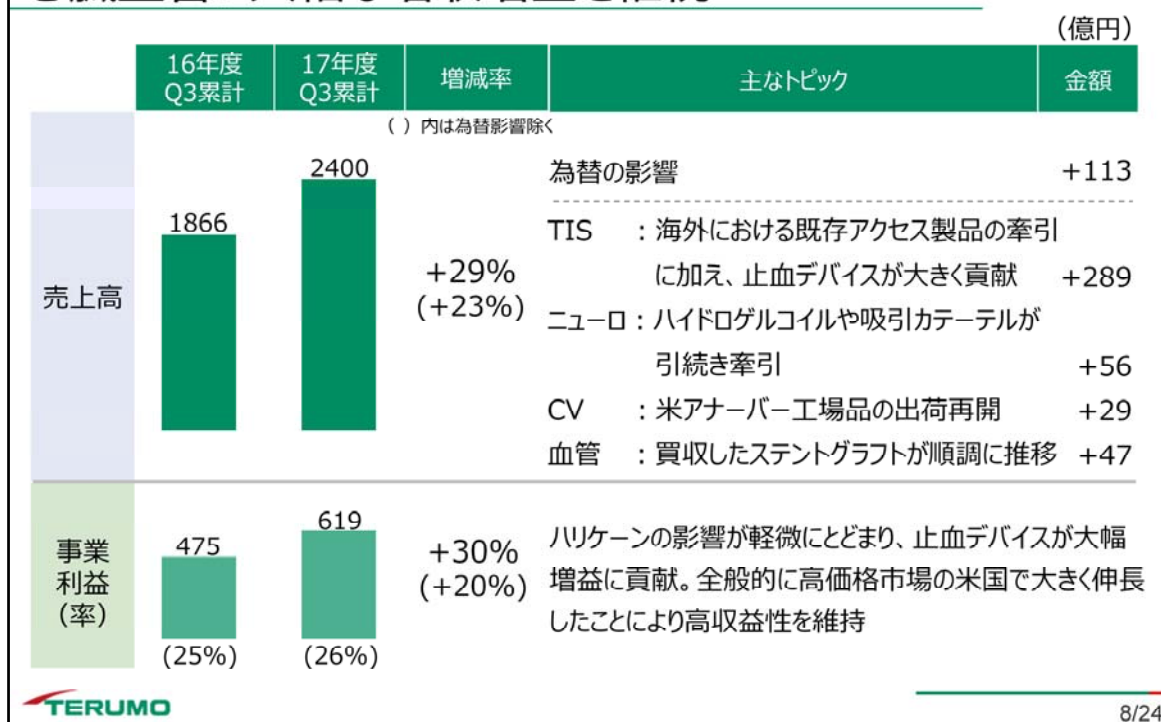
カンパニー別売上高



カンパニー別の売上高です。こちらも地域別の売上高と同様、上期までの傾向とあまり変わりはありません。

ホスピタルカンパニーの上期の売上高は前年同期比1%減でしたが、第3四半期累計では1%増とプラスに転じました。心臓血管カンパニーの売上高は上期に続き二桁伸長となりました。

心臓血管：大幅な増収増益を継続

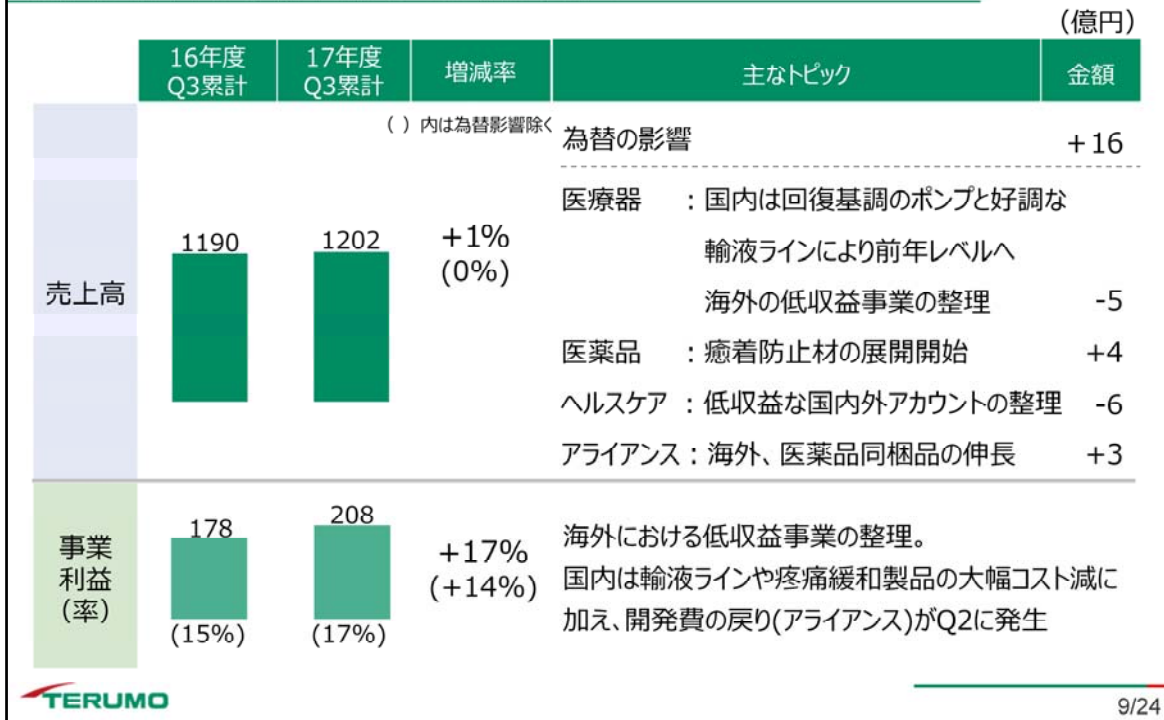


心臓血管カンパニーの売上高は、TIS、ニューロ、CV、血管、いずれの事業も前年同期比で大きく伸長しました。

CV事業では、FDAによる米アナーバー工場への販売制限が解除され、今年度から人工心肺システムの出荷を再開したことから、前年同期比の売上伸長率が一時的に大きくなっています。血管事業についても、2016年度末に買収を完了したボルトンメディカル社の売上が今年度はフルに寄与するため、CV事業と同様、前年同期比の売上伸長率が一時的に大きくなっています。そのため、来年度は、両事業ともに今年度ほど大きな売上伸長率は見込めないと考えています。

事業利益率については、ハリケーンの影響が軽微であったことなどにより、引き続き高い水準を維持しました。

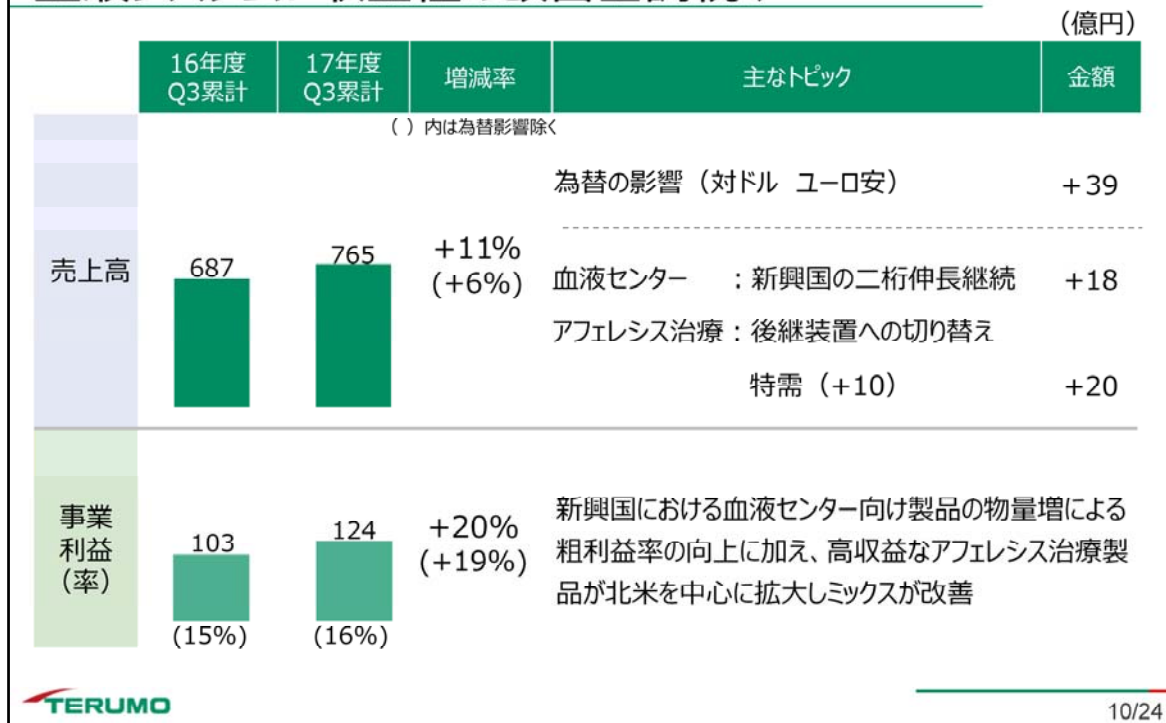
ホスピタル: 売上がプラス伸長へ



今年度のホスピタルカンパニーの売上高は、第1四半期はマイナスでしたが、第3四半期累計で1%増とプラスに転じました。年間でも前年同期比プラスを見込んでいます。コストダウンが着実に功を奏し、事業利益についても高い水準を維持しています。

海外では、過去数年にわたり、低収益事業の整理による収益改善に取り組んできましたが、今年度ではほぼ一巡したと考えています。今後の海外売上高は、アライアンス事業の貢献により、前年同期比プラスに転じると見えています。

血液システム：収益性の改善基調続く



血液システムカンパニーの売上高は前年同期比11%増となりました。収益性の高いアフレス治療製品などの売上が伸びており、収益性の改善基調も続いています。

ただし、売上においては、アフレス治療製品で後継装置への切り替えを進める中で、本来は来年度に見込んでいた売上げ10億円が今年度に前倒しになるといった一時的な特需もありました。

主なトピックス①

全社

- CSR活動：「テルモ富士山森づくり」15周年
地域の方々と植林や森林整備を実施（10月）
- 名古屋・大阪でも株主向け説明会を実施
株主との対話を促進（11、12月）



事業

- 日本初のパッチ式インスリンポンプ
「メディセーフウィズ」の製造販売承認
を取得（11月）
- テルモ山口に新棟建設（12月）
TIS生産体制強化の為300億円投資



11/24

主なトピックスです。

全社のトピックスとしては、CSR活動である「テルモ富士山森づくり」が今年度で15周年を迎えたことや、名古屋、大阪での株主向け説明会の開催などがありました。

事業におけるトピックスでは、日本初のパッチ式インスリンポンプ「メディセーフウィズ」の製造販売承認の取得や、テルモ山口の新棟建設発表などがありました。

主なトピックス② 止血デバイス「Angio-Seal」再出荷

- 10月中旬：段階的に生産を再開
- 12月下旬：地域の送電安定
- 1月初旬：在庫積上げ後、顧客への出荷を再開



インパクト

- 日欧は在庫でマネージし影響は限定的。
米国はバックオーダーに（1月末に解消）
- 11・12月のグローバル売上は従来の半分に減少



TERUMO

12/24

止血デバイス「Angio-Seal」の再出荷について詳しく説明いたします。

「Angio-Seal」を生産するプエルトリコの生産子会社では、ハリケーンの影響で9月20日に生産を停止しました。その後、生産が再開できない状況が続きましたが、10月中旬から自家発電を使って段階的に生産を再開しました。11月中旬にはほぼフル生産に入り、12月には地域の送電も安定してきたため、自家発電から切り換えて、通常の生産に戻すことができました。1月初旬には、在庫を積み上げた後、顧客への出荷を再開しました。現在はフル生産状態で、順調に操業しています。

上期の決算説明会では約1.5カ月の在庫がある旨を説明しましたが、これは全体の数字で、地域によりやや状況が異なりました。例えば、日本や欧州は1.5カ月の在庫で対応できました。一方、米国が一番大きな市場であるため、一時的に12月にバックオーダーが生じましたが、1月の再出荷により解消することができました。

このような状況下で、グローバルでの「Angio-Seal」の売上高は、10月は通常の水準でしたが、11月、12月は、通常の半分程度となりました。1月の売上高は、再出荷を開始したため、バックオーダーの分も含めてかなり大きく伸びていますが、2月以降どのように推移するのか予断を許さないため、引き続き注意深く見ていきます。

17年度パイプライン製品のローンチ状況

領域	製品	地域	領域	製品	地域
心臓	PTCAバルーン	米: Q4	CV	人工心肺装置(再出荷)	◎ 済み
ペリ フェラル	ステント(TRI)	★ FY18		次期・人工肺	◎ 日・欧・米 FY18
	PTAバルーン(TRI)	★ FY18	医療器	縦型・輸液ポンプ	日: 済み
	PTAガイドングシース(TRI)	★ FY18		抗がん剤暴露防止システム	済み
	薬剤塗布バルーン	◎ ★ 欧: Q4	DM	パッチ式・インスリンポンプ	★ 日: 承認
	塞栓コイル	◎ 済み	血液	次期・成分採血装置ソフトウェア	日: 済み
脳	プロテクションデバイス	済み			
	ハイドロゲルコイル 3D	済み			
オンコロジー	放射線塞栓ビーズ	★ 済み			

◎ 業績貢献 大、★ イノベーション度 高



13/24

2017年度パイプライン製品のローンチ状況です。

業績予想の修正

- 売上 : TISやニューロの好調を考慮。加えて、血液システムにおけるアフレスシ治療の後継装置への切り替え特需など、一過性要素を反映
- 営業利益 : 止血デバイスへのハリケーン影響を乗り越え、下期業績予想を達成する見通し
- 純利益 : 米国税制改革の影響を反映

(億円)

	売上高	営業利益	経常利益	純利益
従来予想	5,750	820	795	530
今回修正予想	5,880	920	895	760
修正額	+130	+100	+100	+230



14/24

今回、業績予想の修正を行いました。従来の予想に対し、売上高130億円増、営業利益100億円増、経常利益100億円増、純利益は米国税制改革の影響を含めて230億円増とそれぞれ上方修正しました。

この中から、営業利益について詳しく説明いたします。上期が終わった時点で、従来予想に対し約90億円上振れしていましたが、予想を据え置きました。その理由は主に3つあります。第一に、下期は当初の上期予想額に対し40億円多い計画となっており、ハードルが高くなっていったことです。第二に、販管費の発生が計画に対してやや遅い進捗であったことです。第3四半期以降に増えてくることを想定していましたが、どの程度の規模で発生するのか、読みづらい状況でした。第三に、ハリケーンによる生産停止の影響額がその時点では計算できなかったことです。ただし、上期で90億円の上振れ分があるため、仮にプエルトリコの影響が大きく出たとしても、従来予想の820億円は何とか達成できると見ていましたので、上期の決算発表時点では従来予想を据え置きました。

一方、第3四半期までの業績推移を見ると、販管費は予想した通り増えてきましたが、売上は引き続き好調に推移しており、かつハリケーンによる影響もあまり大きくなかったことから、上期の上振れ分90億円に下期で10億円を積みし、合計100億円の上方修正を行いました。

以上で説明を終わります。ご清聴ありがとうございました。

参考資料

事業別・地域別売上高と伸長率

(億円)

事業 セグメント	日本	海外					合計
		計	欧州	米州	中国	アジア	
心臓血管	405 (+9%)	1995 (+26%)	615 (+24%)	880 (+30%)	255 (+20%)	245 (+24%)	2400 (+23%)
うちカテーテル※	310 (+9%)	1610 (+27%)	492 (+21%)	677 (+35%)	238 (+18%)	204 (+24%)	1920 (+23%)
ホスピタル	938 (0%)	264 (-2%)	62 (-1%)	57 (-3%)	16 (+2%)	129 (-3%)	1202 (0%)
血液システム	84 (-2%)	681 (+7%)	184 (+2%)	325 (+7%)	41 (+15%)	130 (+11%)	765 (+6%)
合計	1429 (+2%)	2941 (+18%)	861 (+17%)	1263 (+22%)	312 (+18%)	504 (+13%)	4370(+12%)

※ニューロバスキュラー事業含む
() 内は為替影響除く前年比伸長率



16/24

販管費

(億円)

	16年度 Q3累計	17年度 Q3累計	増減	増減率	為替除く 増減率
人件費	546	631	+85	+16%	+11%
販促費	112	126	+14	+12%	+8%
物流費	84	94	+10	+12%	+10%
償却費	189	279	+90	+47%	+41%
その他	272	306	+34	+13%	+9%
一般管理費計	1,203 (32.2%)	1,436 (32.8%)	+233	+19%	+15%
研究開発費	245 (6.5%)	287 (6.6%)	+42	+17%	+14%
販管費合計	1,448 (38.7%)	1,723 (39.4%)	+275	+19%	+15%

四半期の動き

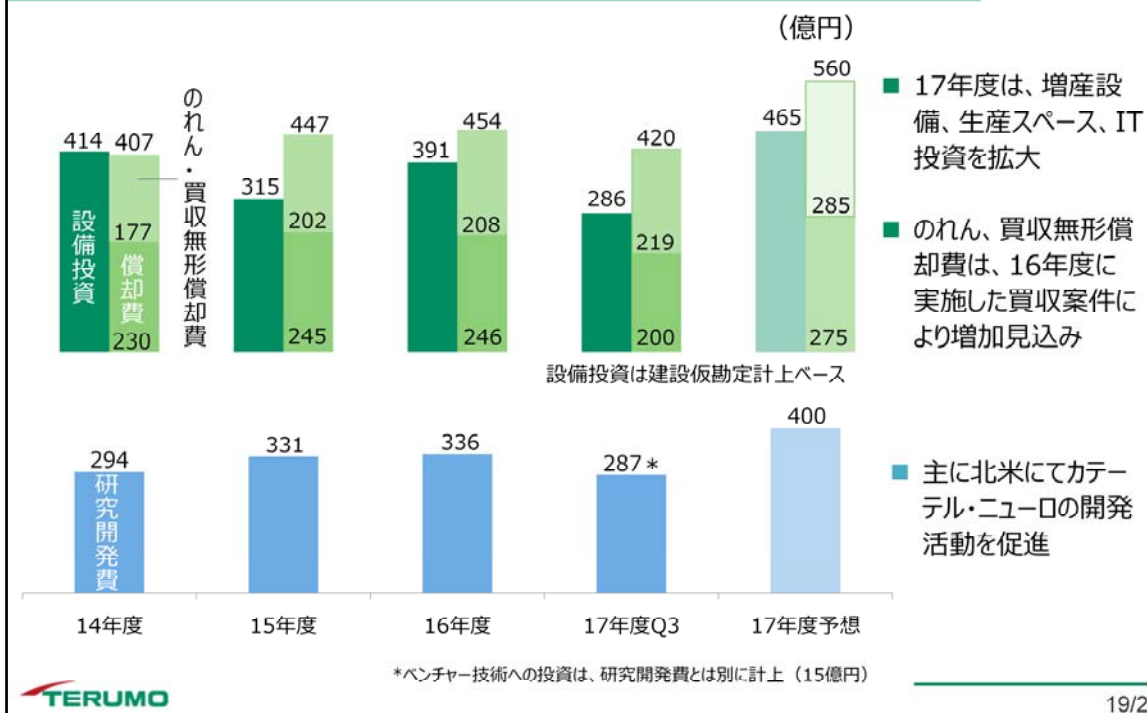
(億円)

	16年度Q3 (10-12月)	Q4 (1-3月)	17年度Q1 (4-6月)	Q2 (7-9月)	Q3 (10-12月)
売上高	1,293	1,398	1,393	1,453	1,523
粗利益	687 (53.2%)	743 (53.2%)	783 (56.2%)	814 (56.1%)	850 (55.8%)
販管費	410 (31.7%)	474 (34.0%)	464 (33.3%)	473 (32.6%)	499 (32.7%)
開発費	82 (6.4%)	92 (6.6%)	85 (6.1%)	96 (6.6%)	106 (7.0%)
営業利益	195 (15.1%)	177 (12.6%)	234 (16.8%)	245 (16.9%)	245 (16.1%)
のれん等償却 除く営業利益	245 (19.0%)	242 (17.4%)	306 (22.0%)	318 (21.9%)	319 (21.0%)
四半期 平均レート	USD 109円	114円	111円	111円	113円
	EUR 118円	121円	122円	130円	133円

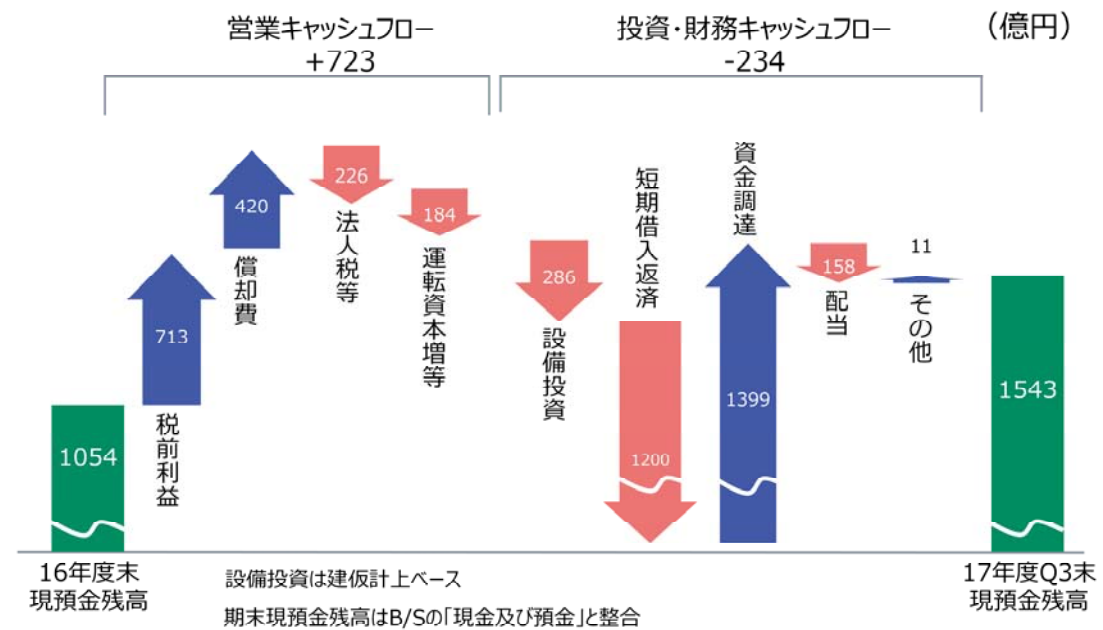


18/24

設備投資と研究開発費



キャッシュフロー



17年度 為替感応度

(億円)

	USD		EUR	人民元
	のれん等償却 除く	のれん等償却 含む		
売上高	16	16	8	18
営業利益	0	-2	5	9

<参考> 10%変動時のインパクト

	北米	中南米	欧州		アジア	
			ユーロ圏	その他	人民元	その他
営業利益	-18	8	56	10	14	33

(参考) IFRSベース

- 2017年度 期末決算からIFRS（国際会計基準）を適用
- 開示スケジュール 2017年度第1～3四半期 : 日本基準
2017年度期末決算短信から : IFRS

参考

(億円)	日本基準 17年度Q3	IFRS 17年度Q3	影響
売上高	4,370	4,370	-
営業利益 (率)	724 (16.6%)	870 (19.9%)	+146
調整後営業利益 (率)	943 (21.6%)	975 (22.3%)	+32
純利益	635	762	+127

調整後営業利益：営業利益から買収費用や買収に伴い取得した無形資産の償却費等を調整した利益

転換社債の状況

■ 社債明細 (2014年12月起債)

満期	発行額 (億円)	金利	転換価格 (円)	転換制限 価格 (円)	転換の場合 必要となる株数
2019年12月	500	0.0%	3,868	5,028	12.9百万株
2021年12月	500	0.0%	3,868	5,028	12.9百万株
計	1,000				25.9百万株

■ 転換状況 (2018年1月31日時点)

対象社債	転換行使額 (対象社債総額比)	交付株数 (発行済株式総数比)
2019年12月満期	54.7億円(10.9%)	1.4百万株(0.37%)

➤ 転換行使による株式交付は自己株式を充当

・自己株式の状況：27.8百万株(2017年12月末時点、発行済株式総数比7.3%)

おことわり

テルモの開示資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、当社が現在入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいており、当社としてその実現を約束する趣旨のものではありません。様々な要因により、実際の業績等が変動する可能性があることをご承知おきください。実際の業績に影響を与えうる重要な要素には、テルモの事業領域を取り巻く経済情勢、為替レートの変動、競争状況などがあります。